

---

銭作品] **うちの巫女というものは** &lt;**勝負はこれから……？** - 祝日番外号 - &gt;

帰宅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「 連載挑戦作品 」 ウチの巫女というものは >勝負はこれから……? - 祝日番外号 - <

### 【Nコード】

N7610S

### 【作者名】

帰宅

### 【あらすじ】

一族の娘の元へ月に一度来る通称「お客さん」。幽霊だったり妖怪だったり来る人種(?)は様々だが、一族の当主真砂の場合は孫息子だった。しかもこの男、己の願望を叶えるべく暗躍している! ? 「何故私に言ってきたのです。あなたの担当になってしまったではありませんか」「でも任命したのはオレじゃないしなあ」これは苦労性の主人公がようやく掴んだ平穩を上記の理由でまたも破られる、その悪循環を断ち切らんと奮闘する姿を描いた悪循環断絶

推進化（でも時々誰かが邪魔するよ？）作品です。 「あああーも  
おおー！！」

「何故私に言ってきたのです。あなたの担当になってしまったではありませんか

古くから高い霊力を誇る巫女を輩出してきた一族の娘たちには毎月一度、「お客さん」と呼ぶ存在がやって来る。

その存在は幽霊だったり妖怪だったり様々な人種(?)だったが、中でも一族の当主真砂の場合は血縁の者が訪れていた。

しかもそれはきょうだい(兄妹)ではなく祖先でもなく、何と孫息子が時に過去へ時に未来へ時間を逆上って訪れていたため、さすがは一族の当主と評判が高まり、同時に一族はますます栄えるばかりに見られていた。

だがその孫息子がただの「お客さん」などではなく、己の願望を叶えるべく暗躍していることを宣言してきて!?

「何故私に言ってきたのです。他にも原因はありましたが、それでもこの発言相手を私に選んだせいでああなたの担当になってしまったではありませんか」

「でも任命したのはオレじゃないしなあ」

さて、と自身に声を掛けるなり男はすつくと立ち上がり、

「じゃあな。次に会わないことを期待してるよ」

嫌味なほど颯爽と従兄弟は去って行き、

「……………つつつあああーもおおー!!」

残された従姉妹は周囲に誰もいないことを確認してから思う存分頭をかきむしった。

これは苦労性の主人公が自身の平穩を守るべく邪魔をされながらも奮闘する姿を描いたもぐらたたきの平穩模索作品です。

「逃げられました」

血も滲めとばかりにひとしきりかきむしってから指に絡みついた髪の毛を払い落とすと、私は襟元をくつろげネックストラップで首から下げていた携帯電話を胸の谷間……ではなく鳩尾みぞおちの辺りから取り出し、発信履歴から電話を掛けた。

「どうだった」

「逃げられました」

単刀直入なやりとりの通りこの上司は簡潔を好む。よって私も結果だけを告げ、上司の反応を待った。

「隠れたか」

「間違いないでしょう。追いますか」

「その必要はない」

どうせ相手は「お客さん」だ、来月また来る。

言外にそう言い切ると、どうやら背中でも伸ばしたらしい。ううんという唸り声を上げてから上司は話へ戻り、

「次に捕まえれば済むことだ。報告書は」

「今晚中には必ず」

「結構。朝になったら読んでおく。いつもの通り机の上に置いておいてくれ」

「かしこまりました」

短く指示だけ残して通話を切った。

全てにおいて端的なこの上司は、はたから見ると冷たく感じられるらしい。

だが誤った指示を与えられたことなど一度も無いため、私自身は満足している。

ではお休み、よい夢を。

こんな言葉を毎回ほざき続けた前任者とは比べものにならない。改めて先の人事異動に感謝しつつ、私は携帯電話の終話ボタンへ

指を伸ばした。

「ときと読みます。お間違いないように」

私の名前は斗姫という。

もちろん本名ではない。

一族の娘は全て名前の最後の一字に姫を付けて呼ぶため、私の名前は斗姫なのである。

そのため例えば名前が由香なら香姫となるし、有希なら希姫となるわけだ。

よって名付ける際によその家とかぶらないよう親たちは必死になって名前を考えるわけだが、まあそれは横に置いておこう。

なぜ一族がこんなことをしているかというと、実は同業者への対策だったりする。

巫女という職業上、自身の名前は魂に繋がる重要なものとなる。

普通の人の心臓に匹敵するといえればわかりやすいだろうか。

よって一族の娘は自分の命を守るため、あえて真の名前を伏せ、元の名前に一字を付けた通称名で通しているのである。

……正直、「姫」付けは非常に恥ずかしいのだが。

ちなみに私の名前の読み方は本来なら「とき」になるべきなのだが、これだと天然記念物の方を連想してしまうのではないかと知らない指摘をした人間がいた。

お陰で斗の字を「ほし」と読む場合もあることから、私の名前の読み方は「ほしひめ」、あるいは「ほしのひめ」となっているのである。

……占星術など全然できないのに!!

なのでせめて一族の外だけでもと外部で使う私の名刺には「とき」のふりがなをこれでもかと名前よりも大きく振ってもらっている。

渡した相手は間違いなく失笑するが、

「じ……これは……」

「ときと読みます。お間違いのないように」

「……っ、失礼しました」

顔色を変えず、すぐさま釘を刺しておくため、思惑通り私は一族の外では「とき」と呼ばれていた。

この勢いで是非とも一族の中でも「とき」で浸透させたいところなのだが。

「これはほしのひめさま。残業ですか、お疲れ様です。そうそう、前に出された書類ですが、不備がありましたので机の上にお返ししました。3日以内に再提出して下さいね」

お先に失礼します、という彼女の足音のように私の主張は軽いものと受け取られているため、道のりははるかに遠く、険しいものだった。



「……………っっ！！」

あの腹立たしい宣言を聞かされてから大分経つ。

だが前述の通り私はあれを押さえられず、それどころか私があるを逃がすことが慢性化しつつあった。

自分の全てを賭けて挑むものの、涼しい顔で常にすり抜け、悠々と現れては幻のごとく去って行く。

一族の中ではあれと私を某三代目怪盗と先祖が岡っ引き警部に例える者すら出てくる始末だ。

情けないことこの上ないが、それにも関わらず私が一時期外されたことはあっても現在ののように復帰してからはあれの担当から外されなかつたり、あるいは一族総出で押さえにかからないのはひとえにあれの器用さにあった。

そもそも一族の霊力とは女系の遺伝、すなわち母から娘へ、娘から孫へと主に伝わっていくため、例外で受け継いだあれと私を含む一族の娘の霊力の差など本来ならば話にもならないものだった。

しかし実戦では時に机上の数値・計算が通じないもの。

逆に霊力がさほどなかったからこそその霊力を効率的に使い、霊力の高さゆえに霊力で押ししまい持久戦だといくらももたず、巫女たちをスタミナ切れに追い込んでよく征していた。

すると負けるはずもないと侮って相手をした巫女たちはすっかり自信を失い、使いものにならなくなって帰ってくるのである。

おまけにあれの口の容赦がないこと。

いずれ一族を支える巫女となると文字通り大事に大事に育てられてきた箱入り娘の手などに到底負えるものではなく、結果、一部で「雑草」と陰口を叩かれているしぶとい私那不本意ながらもこうして担当し続けているわけなのだ。

逃げられ続けるのも今に始まったことではないし、どうやら取り

柄と評価されているらしいしぶとさを発揮してまた対策を練り次に  
捕まえればいい話なの、だが。

だが、それでも。ああ、それでも。

「……………っっ！！」

今回も捕まえられなかった自分に対する憤りやあれに対する苛立  
ちに再び怒りを吹き出しながらも上司の指示通り報告書を作成すべ  
く、私は静かな月明かりとは対照的に足音荒く自分の机へ向かって  
行った。

「……………っっ!!」(後書き)

斗姫からのお言葉

「どうも、主人公です。情けなくすみません。今回はあれの話と私の話でしたね。次の更新は海の日ですが、その前の6月中に一件本編へ出張の予定が入っております。本編ともどうぞよろしく  
お願いします」

「えーっと……………、……………」

パソコンの電源を入れ、椅子を引き腰を掛ける。

ネットクストラップを首から外し下げていた携帯電話を机の上の充電器へ差し込み充電を開始する。

ついでに首筋を揉んだり肩をまわすなどして体のこりをなだめると、引き出しの中から目薬とドリンク剤を取り出しそれぞれ服用した。

何だかこれから残業に臨むキャリアウーマンかサラリーマンのようだが、似たようなものだから仕方がない。

携帯電話にパソコンにドリンク剤。いわゆる文明の利器であるため、巫女が使うなど、と眉をひそめる方もいるだろう。

事実ドリンク剤はともかく他の2つにおいてはその通りとしか答えようがない。

だが残念なことにこの便利さには代えられないもの。

「えーっと……………、……………」

なのでこのようにたとえ雨だれも驚くような早さとはいえ手書きよりは遙かにはかどると割り切ってパスワードを入力し、例の起動音が鳴るのを待っている次第なのである。

「こんなことなら途中で投げ出さないで、ちゃんとお習字、励めば良かった……………」

事務書類は手書き禁止

ただし達筆な場合を除く

……………目の前の柱に大きく貼ってある書道家の作かと思わせるような注意書きの見事な筆使いとその内容に頭を抱えながら。

「はあ~~~~ああ」

かたやパソコンで制作したワード文書、かたや日本伝統の和紙にさらりと書き流したかのような墨痕鮮やかな毛筆での手書き。

思いつきりハイテクとローテクが同居しているが、これは仕方がないのである。

「おや、ほしのひめ殿。残業ですか？」

「ええ。まあ」

そう言つて久しぶりに机上のキーボードとディスプレイの画面との往復を止めた相手の頭には美しく整えられた鬘が結わえられていた。

まあ現役の武士だった彼の享年においてはごく自然だったので誰も何もつっこまない。

「お疲れ様です。では、それがしはこれにて」

「はい。綾姫によろしくお伝え下さい」

というこの会話が表すように、こういつた事務仕事を自分の式神や彼のような使役している幽霊や妖怪に任せる巫女が多い。

……というか、ほとんどがそうなのである。

では全て手書きで統一すればいいかというところでもない。

「ん？ これは……ほしのひめ殿ですか」

「ああ、中村殿。残業でしたか」

「はい。恥ずかしながら最近、机仕事をおろそかにしています。領収書が……と頬をかくこの中村殿、もとい中村さんはれっきとした生きている人間である。

「ですがそうおっしゃるほしのひめ殿も同じご様子ですね」

「はあ。ちよつと……」

と今度頬を書いたのは私の方である。

「宜しければお手伝いいたしましょうか？」

始めてからかなり経つというのに題名から2〜3行しか進んでい

ない私にとっては願ってもない申し出なのだが、残念ながら彼の給料を払っているのはウチの一族でもなければ当然私でもない。

「いいえ。中村殿も主の鈴姫殿が待っておいでなのでなのでしょう?」

これは私の仕事ですから、と頭を下げて中村さんには丁重に断つて……………。

「はあ……………あぁ」

深いため息を吐いてから式神も使役する幽霊も妖怪も使用人を付けてくれる実家もない私はキーボードとディスプレイの画面との視線の往復を再開したのだった。

「はあ~~~~あぁ」(後書き)

斗姫からのお言葉

「どうも。主人公です。ないない尽くしですみません。今回は事務関連の話でしたね。次の更新は8月8日を予定しております。今まで日付が抜けていて申し訳ありません。そして良ければまた読みに来て下さい」

キリ、アサ、サトリー！ ビバ！ 麦般若！！

ようやく仕上げた報告書をプリントアウトし、端を揃えて上司の机へ提出した頃にはすっかり月が昇りきっていた。

照明のスイッチを落とし、バックを肩に掛けながら外に出て行く。しんとした空気が身に染み渡る。

深呼吸と共に伸びをし、体の凝りを追い出したらもうすることはただ一つ。

残業帰りのお楽しみである家飲み晩酌の仕入れ、コンビニ参りだ。

お酒は当然ビール。缶は350mlか500mlか。

おつまみもスナック菓子か、冷凍のピザか。

レジの隣の唐揚げといったあたたかい揚げ物などもいいかもしれない。

そんなことをつらつら考えながら歩いていくのもこれまた楽しいのである。

……まあ、本来なら清浄を旨とすべき巫女にはビールのようなお酒や生臭物とされるお肉（を使う唐揚げなど）の飲食は許されていない。

成長期には体の発育のために適用されていないが、成人した巫女については禁止されている。

しかし何事にも例外はつきもの。

そして禁止されればされるほど試したくなってしまうのが人間の性分というものなのだ。

事実、お酒のことを般若湯といい一部のお寺では許されていた歴史もある。

よって日頃の禁止令とは別に、一族からの仕事を終えた後は例外とされていた。

つまり、成果はともあれまさに今日あの従兄弟殿との対峙を終え



てきた私にはこの例外が当てはまる上、せっかくの権利を手放す気などさらさらない私は文字通り歌うように……ならば歌詞は、キリ、アサ、サ トリー！ ビバ！ 麦般若！！ といったところか……と最寄りのコンビニへ足を運ぶのだった。

今日は近所のカフェで日替わりランチを食べよう

休日の巫女というのは普通のひとほとんど変わらない。

ごろごろと二度寝し、定時に起きなくていい幸せを噛みしめる怠惰で平和な生き物だ。

特に私は身の回りのことは自分で済ませ、式神も霊も妖怪も置いていないことから、一人でいられる幸福を実感している。

恐れ多いとは思いますが、自立を重んじあえて一人で全てをこなされていた当主であるお祖母さまのお若い頃とは大違いだ。

……まあ、私というのは本当に恐れ多いのだが。

しかし世の人というのはこういう風に身内のことを持ち出したりするそうなので、こうして持ち出すこともお祖母さまなら案外喜ばれそうだ……などとつらつらと考えながら昼を迎え、のそのそと起きだした。

朝食と昼食の間、これがいわゆるランチである。

ふああ、と生あくびをしながら身支度を整え、携帯電話とお財布を詰めたバッグを手に部屋を出る。

自業自得と言われればそれまでなのだが、昨日の家飲みの後片付けだけで私の気力が尽きたのだ。

……ついでに言えば、億劫でもある。

今日は近所のカフェで日替わりランチを食べてこよう。

帰りは公園へ寄って散歩して、街路樹で少し消耗した霊力を回復してこよう。

そんな計画を立てながら、私は外へと出かけたのだった。

「嘘」

しかし怠惰で平和でいられたのもここまでだった。

思えば、奴も一族であるからには行動範囲がかぶるもの。

「……あ」

「嘘」

何と休日にもかかわらず天敵ともいえる奴と遭遇してしまったのである。

慌ててバッグの中からお札を出しかけたが、

「またな」

と言い残すなり相手は文字通り消え去ってしまった。

「どういうこと……？」

後には身構えながらも困惑する私のみ。とにかく冷静さを取り戻さなければと私は構えていた体から余分な力を抜いて大きく息を吐き、携帯電話を取り出してバッグの口を閉じた。

……念のためさぐっておいた感触からすると隠しポケットの中のお札は3枚。

対峙した時に使うのは4枚強だから本当にギリギリだった。

向こうから退かれて助かった、が……。

「奴の方でもニアミスっぽかったわよね？」

わずかの間ながらも奴の様子を思い出し、分析する。

少し迷いながらも上司に報告することに決め、私は彼の番号を携帯電話のアドレス帳から呼び出した。

「1」馳走さまです」

上司の携帯電話へ連絡を入れることは始めてではなかったが、休日に掛けるのは始めてだった。

これが前の上司なら甘ったるい声を出してくる上、電話をかけてきた邪魔者である私に対する牽制らしい女性の嬌声が背後から聞こえてきたものだったが、さて今度の上司はどうなのだろう。……意外にもつと凄かったりもするのだろうか。

僅かなコール音の間にふとそんなことを考えてしまったものだから、

「もしもし」

という常と変わらない硬質の声に安堵すると同時に静かな背後へ妙な想像をしてみましたやましさを抱いてしまい、自分に対して内心がつくりと肩を落としていたのだがそれはそれ。極力平静さを保ちながら、私は簡潔に経緯と状況を説明した。

「……そうか。ところで今後の予定は」

「ありません」

「では直接会って詳細を聞きたい。その近くに話が出来る場所は」とすると上司は予想通り詳細な説明を求めてきたため、とつさに昼食用の近所のカフェの名前を答えていたのは……実は先ほどから悩まされていた空腹感に負けたからではない。

「わかった。ではそこで合流しよう。ところで昼は取ったか」

「いえ、まだ」

そう答えたのも財布の中身が淋しくなってきたから……ではない、とも。

「ではささやかながら昼は奢ろう。休日出勤の詫びだ」

好きな物を何でも頼んでおくように……。

その瞬間、普通の日替わりランチからデザート付きのスペシャルランチを頼むことに決定したのは……まあ、あたたかい上司の心遣

いを受け取る部下として当然であり、また休日出勤の代償というこ  
とで見逃していただく。

「ご馳走さまです」

……たとえ電話越しで見えないからといって浮かべた笑みが会心  
のものであったとしても。

かくして私の休日は幕を閉じ、昼食のメニューが決定したのだっ  
た。

「……お祖母さまへ報告いたしますか」

サラダとスープとパスタにコーヒー。

この税込500円のランチセットにプラス80円でケーキが付くのがスペシャルランチだ。

土日祝日限定だが、実にお得である。

とはいえいかにお得であろうと自腹を切るならそのプラス80円が気になるところ。

それなりの家に生まれて大事に育てられてはいても、人生に「確実」なんてないことくらいもうわかってる。

……なんていうのはただの屁理屈で、単に貧乏性なだけなのかもしれないな、と頭の中で結論を出し、ケーキの最後の一口を味わいながら私はちらりと上司の顔を見た。

現在の上司は前の上司と違い、一族に数ある分家の中でもかなり本家に近い家柄だという。

血筋では今まで散々馬鹿にされてきたため、私にとってそれを誇るなど唾棄こそすれ断じてありはしないのだが……それでも、この上司に限っては例外としても良いのではないかと思う。

本来血筋を誇るはその血筋を守ってきた血族を尊ぶことなのだと思います。

「……さて」

「はい」

だから私はタイミングを見計らわれていた上司に声を掛けられた瞬間、馥郁としたコーヒーの香りも贅沢なケーキの甘さも吹き飛ばし、頭の中を仕事モードへと切り替えた。

「あれが出たんだな」

「はい」

上司の問いへ端的に返す。

すると上司は何かを思い出すように指先で2、3度テーブルの端

を叩くと、見当がついたのだろう、

「・・・あの時か」

と額を抑え呻いていた。

今の上司に変わって大分立つが、こんな風に上司が自分の感情を表したのは初めてだ。

よって私は禁じ手を出した。

「…………お祖母さまへ報告いたしますか」

一族の総領であられるお祖母さまは現在年齢のこともあって第一線こそ退かれているものの、依然実権を握られ続けている。そのお祖母さまへ指示を仰ぐことを提案したのだ。

本来、一族の件は一族で解決するもの。

だからこそお祖母さまの孫である奴の件も同じお祖母さまの孫である私が解決を命じられた。

その命令を出したのは現在の上司だが、上司へ解決するよう指示を出したのはお祖母さまのはず。

今回はあの日以来、つい最近私の前へ現れてから一ヶ月経ってもない内にお祖母さまの「お客さん」である奴が「お客さん」のまま姿を現している。

これは普段感情を出さない上司が表に出すのも無理のない、不測の事態ではないかと判断したのだが……。

「いや」

と私の提案を退けた上司は冷静さを戻していた。

「今回の件は想定の内だ。私が君に注意をし忘れていた」

すまない、と頭を下げた上司はむしろ何か腑に落ちたような表情をしていたため、あっけに取られた私は慌てふためいてしまい……。

結果、おごってもらえるはずだった私のスペシャルランチの代金に加え、上司の分のブレンドコーヒー代まで支払っていたことに気がついたのは自分のマンションの玄関前だった。

「……朝か」

鳥が鳴く。

ちち、ちち、と明るくさえずる。

けれどリビングから飛び込む鳴き声には命がない。

それはこの寝室までの距離にさえぎられたからではなく、命自体が元からないせいだった。

「……朝か」

窓から差し込む光に目をしばつかせ、リビングで目覚まし時計代わりに時間を告げさせている一族から与えられた式神の声に引かれ、私はずもぞと布団から起き上がった。

巫女の朝は早い。

正確に言えば巫女としての仕事が入るか本家に用がある時は、と  
言うべきなのだが、巫女としての仕事があつて職場である本家の屋敷へ出勤しなければならぬ私にとっては同じ意味のため、そこは大目に見ていただきたい。

とにかく頭の中が朦朧としながらもまずは身支度を整えるべく、洗面所で顔を洗い、洗顔フォームと間違ふことなく無事付けることができた歯磨き粉で歯を磨き、口をすすいでさっぱりした……と思つていたら。

「んん？」

何か様子がおかしい。

いぶかしみながら洗面台へ視線を戻すと、そこには珍奇な光景があつた。

先ほどコップに挿したはずの歯ブラシが、なぜか隣の一輪挿しに挿さつていたのだ。

幸い一輪挿しの方は昨日弱った花を捨て綺麗に洗つてあつたため衛生上何の問題はない。



問題はないが……さて、どうしたものだろう。

不思議なことに寝ぼけた頭には「今きちんと挿し直す」という選択肢がない。

よって帰ってきてから

「なぜ!？」

と仰天するはめになるのだが、あくまでそれは帰ってからの話である。

しばらく悩んだ私の取った解決策はこれだった。

次に花を活けるときにちゃんと挿し直せばいい。

よって例のごとく帰宅後に仰天することになるうとも、私は頭の中へ、「一輪挿しに活ける花を買う」と「花を活ける前に歯ブラシをコップへ挿し直すこと」とメモをし、洗面所を後にするのだった。

「おかえり」

この部屋は一族から巫女へ与えられる部屋だった。

一族の土地に建てられた、巫女のためのマンション。

よって部屋は全て高層階に用意され、広さのほうもユニットバスとは無縁のダイニングキッチン、リビング、寝室の他に客間が二間と到底独身者用とは思えない作りになっている。

けれど世の中そううまく話ばかりがあるわけではない。

一族の土地に建てられたということは同時に職場でもある本家から近い。通勤に便利といえれば便利。しかし逆にいえば近すぎるのだ。例えば休みの日だからとぼんやりしながら歩いたとしよう。すると翌日には一族全体にその様子が触れ回られ、

「何かあったの？ 気が抜けた顔で歩いていたらって聞いたけど……」などと様子を探られるはめになっていたりする。

また当然のことながら公務員などのように火急時には本家からの召集が即座にかかるため、嫌な話ではあるが着の身着のまま、一人逃げ出すという芸当は到底出来ないわけだ。

……まあ、しないけど。

むしろ平時においてはこのド田舎のような環境が鬱陶しくはあるものの、それでも通勤時間徒歩3分内という便利さの前に目をつぶり、通勤ラッシュなるものを聞いて「いいなあ」という感想を迂闊に述べて「この世間知らず！」と日々揉まれ続ける友人たちに罵られたりしている。

平和っていいなあ。

などとリビングからダイニングで電気ポットがお湯を沸かす音をぼんやり聞いていると、先ほど私を起こしてくれた私の式神がちい、ちいと鳴きながらくちばしでガラス戸を叩いてきた。

「おかえり」

私は立ち上がりながらそう言ってガラス戸を開けると、2、3度  
訴えかけるように鳴きながら旋回し、式神は自ら鳥かごの中へ戻っ  
て行った。

「さて、じゃあ行きますか」

閉めた戸の鍵を掛けて自室へ入り、クローゼットの中からいつも  
の着替えセットを取り出すと、部屋を出るべく玄関へ向かった。

目的地は最上階。住民専用のプールである。

「おはよう」

このマンションの最上階にはプールが設置されている。

といつてもこの建物は巫女を住まわせるためのいわば社員寮のようなもののため、高級感を演出したわけでもなければ泳ぐためのものでもない。

英語の pool、水たまりという意味がさすように、目的はプールに張る水にあった。

チーンと表現したくなるクラシカルな開閉音と共にエレベーターが開いた先には、頭を下げて待つ存在がいた。

「おはようございます、斗姫さま」

「おはよう」

しかし私は義務的に挨拶を返すと特に目線を合わせることもなく履物を換え、フロアに入った。

朝っぱらから随分冷たい反応だなと思われるかもしれないが、向こうも挨拶が返るなり置物のように突っ立ってこちらを見向きもしない。

能面のような顔でエレベータへ向かい立ち続けるこの相手も一族が付けた式神であり、プールを守る管理人兼番人なのだ。

何しろここは対外的にはプールと称しているものの、実際には地下水が張られた襖みすきの場。巫女が仕事に入る前に身を清める場所なのである。

よってこのマンションに住む巫女は出勤前と出勤後に必ずここで身を清める。でなければ職場である本家へ入れない。

その毎朝・毎夕の混雑たるや間違いない想像を絶するものだろう。よって無用ないさかいを避けるべくこうして管理人であり、外部

……というよりウチの商売敵から汚染などの妨害工作をされたりしないための式神を置いている。

けれど納得する人間がいれば必ず反対意見が出るもので、こういう所にまで式神を置くのはどうか、このくらいの仕事なら一族の間を雇用すればいいじゃないかという意見も実は少なくなかったりする。

巫女の数は少ない。

一族のほとんどの者が霊力を持たず、自活する能力のない者はまず一族の仕事に籍だけを置き、普通の道楽息子・道楽娘と変わらない生活をしている。

外聞を考えるならそれよりは世間と隔絶された場所で立派な名前だけをあてがい、実態を知られないまま何とか誤魔化したいところなのだろう。

また、いかに一族が表の企業にある程度のポストを揃えているとはいえ、限度というものがある。

血筋の薄さといった理由であぶれ、一般社会でも就職が難しくなれば一族でも雇用問題を考えて欲しいと訴えるのは当然のことだ。

合理性を認める反面、反対意見についても一理あるため考えるべき問題ではあるが、それでも実際にこの施設を使っている人間としては一族にはこのまま式神を置き続けてもらいたい。

同じ一族の式神同士、自分の式神にプールの使用の順番取りがさせられるというのも勿論あるが、一番の理由は式神だからだ。

人を置けばいつか必ず懐柔される。

一族の中で血筋が高い者や財力が豊かな者の順番を優先させたり、あるいはその逆だったり。

そして考えたくもないが……商売敵に懐柔され、水を汚すどころか「何か」を仕込むことだってありえなくはない。

ありがちではあるが、一番恐ろしいのは式神よりも人間だという結論に達し、気が重くなったところで更衣室とプレートが打たれたドアが目に入る。

私は深呼吸を繰り返し、気を整えてからドアノブに手を伸ばし、着替えに専念することにした。

## 私は自分自身を封じ込めた

更衣室へ置かれた全身鏡の前に立つ。

白装束に身を包んだもう一人の自分。

巫女としての自分。

揺らぐことのない凜とした姿を思い描いて - - 私は自分自身を封じ込めた。

更衣室の出口はそのまま襖みぞきの場への入り口でもあった。

遊泳用の施設ではないため目を見張るほどの広さはないが、一人で使うには十分すぎる広さである。

備え付けられた桶を取り、体に水温へ馴染ませるべく浅瀬で簡単に水を浴びると、私はそのまま足を進めた。

くるぶしを浸すだけだった水は膝を越し、腰を漬け、胸へと上がった。

手がかじかむのがわかる。足の感覚はすでに無い。青ざめていく顔色には効果音が付きそうだった。

それでも上がりたいとは思わない。

凍りつきそうに冷たい地下水は一線を越せば一気に受け入れてくれる。

どれだけ冷たさにこごえても、人間として生きるために受けてしまった穢けがれをすぎ、巫女でありたいのだと念じ続けければ。

自然の力を借りて生きる巫女を、水が受け入れないはずがない。

戻ってくる感覚に顔をほころばせながら私は水中へ潜っていった。

## 私は自分自身を封じ込めた（後書き）

斗姫からのお言葉

「どうも。本来ならとっくにこの話を終わらせていたはずの主人公です。作者のせいとはいえ、旧年中に更新できずに申し訳ありませんでした。次の更新も2月2日を目指していますが、どうなるかとやら……。新年早々恐縮ですが、見捨てずにいてやっていただけるとありがたいです。それでは、旧年中の感謝と新年の皆様への幸福を願いまして締めさせていただきます」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7610s/>

---

[ 連載挑戦作品 ] ウチの巫女というものは &lt;勝負はこれから……？

2012年1月9日00時49分発行